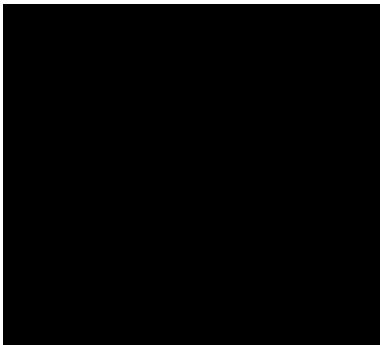


欲



ぼらで  
いん

水没した高層建築群が影を墓標のように  
投げかける海。その凪いだ水面は、

チキンホットバー

鶏飛蝗 とも揶揄される深緑に塗装された

逆関節の金属塊が蹴るごとに大きな飛沫を  
上げている。人間の上半身に鳥類の下半身  
を継ぎ接いだようなそれから、跳ぶたびに  
細かな部品が雲母のように剥がれ落ち、夕  
陽を受けて輝いていく。

アブソバーのコジマ粒子に満たされ緑に  
歪んだ黄昏色に満ちたコクピットの中では、  
男がひとり、苦いものでも口に入れたかの  
ような表情で、しかし笑っていた。

「やりやがった」

薄く唇を上げて口の中で小さく数度目の  
反芻をすると、あらためてコンソールを確  
認する。周囲の機体反応、ゼロ。AMSで  
背中の眼に神経を集中させると、炎上する  
洋上の発電施設、アルテリア・クラニウム

が夕映えのなかで黒煙を撒き散らしている。もはや滲みとなった文明の要。

彼ことオールドキングとその相棒は、数十分前まで遺跡になる前だったそこで、最強の人類どもを向こうに張っていた。利益や思想を超えて集結した精鋭を相手に。

「勝っちまった」

満身創痍にはなったものの、すべて落とした。その代償として、今もまた部品が剥がれ落ちる。右脚の第一関節から下すべて。コジマに護られた機械の胎内にもそれは微細な振動として伝わってきた。

オールドキングはAMSから伝わった幻痛を舌打ちひとつで神経トリガにより遮断させ、機体制御を立て直させる。右半身についたノズルから噴出する緑色の粒子が増え、ぐらついた肢体を支える。物理法則はお前の味方だ。古巣のバールラットで魔術師

の異名を取った隊長に叩き込まれた制動技術。それにまだ生かされている。

悪態をつきつつAMSに認識を引かれて己の体も揺らしながら、彼は相棒と確認し合った会合地点までの距離を確認する。

第六補給所。企業が地上で覇権争いをしていた時代の遺物を、オールドキングを担ぎ上げた反体制武装勢力、リアナが奪ってふたたび命を吹き込んだ補給施設。そんな連中も人類が暮らすゆりかごのクレイドルを叩き落した時点で、混乱してほとんどが彼の元を去った。だが、そんな連中が打ち捨てて逃げた自動工場は忠実に首領の帰還を待っている。

「やるか」

機体に蓄積された損耗は重く、重心もぶれ始めている。うえに、センサ類の不良でAMSに接続された視界すらばやける。機

体に神経接続し、己の体として扱う副作用。  
この男はそれに苛立ちを込めて決意の悪態  
をつく。

スイッチ類のハッチパネルを左親指で弾  
き、詳細な設定を入力しつつ。思考でアサ  
ルトアーマー起動を命令。

周囲を漂っていた薄緑のコジマ粒子が明  
らかな緑の光球となって機体を包み込み、  
それを尻尾のような濃緑の光条として後ろ  
へ噴出させる。

アサルトアーマーが発生させる斥力は  
ブースタとしても使える、応用するには理  
論を知れ。今はもういない魔術師の声が脳  
裏に響く。

もはや人型兵器の矜持などかなぐり捨て  
た塊となり、オールドキングとその機体、  
リザは第六補給所の外壁に激突した。識別  
信号を感知した自動操縦の整備用MTが起

動したらしくアラートが鳴り、それをリザの眼でも確認してから、彼はもう一機のネクスト機体反応が施設内にあるのを確認し、AMSのリンクを解除する。

一瞬全身の感覚が消失し、十メートルの巨人が二メートル足らずの小人へと縮んだことよって、自分の体が驚くほど小さくなったような感覚に襲われる。

生身のオールドキングへと戻った彼は、シートに常備しているハンドガンを片手に、コクピットを開放する。周辺の大気にコジマが拡散し、視界の緑色が薄れていく。生身の感覚を取り戻した彼は、まるで緊張すらないような足取りで施設へと向かう。

もう一機のネクスト機体を駆っていた名前すら知らぬ相棒、首輪付き。

そいつが、ここにいる。

施設の正面にあるエントランスを開いた

ような気配はない。そのまま修理工場へと回るが、ここでは自動MTがリザを牽引してもう一体のネクスト、ストレイドの横にあるハンガへ運び込んでいるだけ。ストレイドもまた満身創痍で、両脚と片腕は完全に交換するしかなさそうなありさまだ。

「来てはいやがるか」

リザを降りて以来無表情だった、戦場の風で余分な部分が削ぎ落とされた男の顔に薄笑いが浮かぶ。工場から事務ブロックへ続く扉に触れた後がないのを確認すると、次はハンガ周辺に巡らされているキャットウォークへ。

ピンゴ  
当たり。

錆と埃だらけのキャットウォークに、真新しい足跡がついていた。彼はそれを辿りながら、崩れそうな通路をもどかしい速足で進む。

一層。二層。三層目には、屋上へと通じるドアがあり、開け放たれた先には全身に夕陽を浴びながら横たわるものがひとり。

「少し、時間かかった？」

やや高い硬質な声。女のもの。意外さに珍しく気後れを感じながら、オールドキングは銃を片手にドアの影から言葉を発する。

「お前がとっとと逃げたおかげでな。首輪付き」

「悪いけど、ストレイドにも余裕はなかった」

「見りゃあわかる。手前は俺以上に命知らずだってのを実感したぜ」

女は気だるそうに上半身をひねって身を起こすと、ゆらりと立ち上がって両手を上げ、肩口ですっぱりと切りそろえた髪が揺れる。

「見ての通り、武器はない」



「女の武器以外はな」

「脱ごうか？」

「悪いが、そういうのでは興奮しねえ性質でな。お前ならわかってるだろう？」

下卑た返しにも動じず、女は口だけを動かして微笑みの表情を作った。

「殺すことでしか、殺戮することでは、興奮しないんだろ？」

「そうだよ。俺はそういう変態だ。最初っからそうだったんだ。だが、イクバールの奴らも、リリアナの奴らも、オルカORCAの奴らも違った」

「彼らは殺すための理由を持っていたから。持っていないと、耐えられない人が多い」  
いつのまにか女はオールドキングの眼前まで足を進め、銃を持たないほうの手を取る。

「ごらん」

そっと引かれたその腕で、彼はドアの影から引き出される。

「夕陽が綺麗だ」

柵の向こうには、黒煙が立ち昇る水平線の向こうに沈まんとする真紅の夕陽が揺らめいていた。女はそのまま柵に両腕を持たせかけ、それを眺める。オールドキングもそれに従い、彼女の横で慣れない様子を隠せないまま同じ姿勢を取る。

「俺のことをひとつ喋った。お前のこともひとつ訊きたい。首輪付き」

「何を？」

「俺と組んだ理由だよ。変態の、どうしようもない欲望を満たすためだけの、何の解決にもならない遊びに。企業連の奴らも、テルミドールの野郎も、俺にはいけすかねえが大義って奴を持っていやがった」

女はくると顔を横に向け、反射で同じ

動作をしたオールドキングの濁りが混じった瞳をじっと見て口を開く。

「変態の、どうしようもない欲望だから」

オールドキングはその相好を崩し、大笑した。女にも唾が飛ぶほどに。

「面白れえ。俺と同じ性癖で、これだけできる実力の奴がもうひとりいたなんてな」

「違うよ」

その一言で、オールドキングの表情は笑いを途中で止められた曖昧なものになる。女は口だけで作った笑いのまま、彼の瞳を直視していた視線を少し落としながら続ける。

「私には、欲望がないんだ。正確には主体的なそれがね」

「どういうこったよ」

疑問を持つ者の表情へ完全に変化を終えたオールドキングの問いに、彼女は淡々と

答える。

「自分から何かをしたいとか、何かをほし  
いと感じたことがない。ただ、ただね」

視線を外したまま喋る女の瞳を、今度は  
男が覗き込む。

「誰かのとても強い欲望に、どうしようも  
ないくらい魅かれてしまうんだ。自分に  
持っていないものを持つてるのが羨ましいの  
かもしれない。だからそれに乗って、一緒  
に満たしたくなってしまう」

女の瞳の中にはただ、硝子のような虚無  
がある。男はそれを見聞きして納得したよ  
うに頷くと、両手を広げて少し離れた壁に  
もたれかかる。

「わかったぜ。俺もまんまとお前の欲望に  
利用されたってわけだ。で、どうだった。  
よかったか？」

女も男の横で壁にもたれ、ぽつりと呟く。

「わからない。ただ、そちらの興奮のよう  
なものはないとなく感じた」

「そうか」

「そっちこそ、どうだったんだよ」

長い沈黙。夕陽は水平線の向こうへ完全に沈み、董色の空に一番星が瞬いた。

深く頭を落としていたオールドキングは顔を上げ、ぎこちない笑みで女に告げた。

「よかったぜ、お前とは」

女は口だけの笑みを崩さないまま、小さく頷いた。

そしてまた、沈黙。

群青の夜空には、コジマ汚染や大気汚染にもかかわらず、ぽつぽつと星が瞬いている。

「夜は冷えるぜ。修理が終わるまで居住区のほうでやり過ごそう」

「そうだな。星は綺麗だが」

オールドキングが居住区のロックを開いて電源を動作させると、通信機からノイズ混じりの割れた声が響く。周波数は、ふたりの離反によってもはや求心力を失い瓦解したORCA旅団のもの。

「マクシミリアン・テルミドールだ。ORCAを、否、人類を裏切った獣どもめ。赦しはしない。頼みはしない。これは命令だ。すべてのアルテリアを落とし、レーエンベルクを起動しろ。もはやどの勢力にもあらを守りきれぬ余力はない。人類の敵となるつもりなら、せめて最後に人類が残した業くらい清算しろ。繰り返す、マクシミリアン・テルミドールだ」

ORCAの首領は死してなお、熱っぽい煽動を、己の死をも諦観していたかの如く既に変換された情報によって、ふたりへと突きつける。

「ご指名されてるぜ。こいつの欲望に乗る気はあるのかい？」

オールドキングの冗談に、しかし女は曖昧な表情で返すのみだった。

〈了〉